厚生労働科学研究費補助金（健やか次世代育成総合研究事業）
分担研究報告書

小児摂食障害におけるアウトカム尺度の開発に関する研究

－学校保健における思春期やせの早期発見システムの構築、および発症要因と予後因子の抽出にむけて－

小児摂食障害患児の知能検査結果について―不登校入院児との比較―

分担研究者　小柳　憲司（長崎県立こども医療福祉センター　小児心療科）

研究要旨：本研究において 2014 年 4 月～2015 年 8 月までにエントリーされた 94 例のうち、経過中 WISC-Ⅳ検査を施行されていた 44 例について、その FSIQ 値を検討した。対照群として、長崎県立こども医療福祉センターで OD や生活リズムの乱れを伴う不登校として入院治療を行った 58 例を用いた。摂食障害群は不登校群に比べ、FSIQ 値が高い子どもが多かったが、高い子どもと低い子どもが比較的均等に存在しており、平均値の検定では不登校群との間に有意差を認めなかった。今回の検討から、摂食障害患児は知的に高い層から低い層まで幅広く分布する傾向のあることがわかった。

A. 研究目的

摂食障害、とくに神経性やせ症に罹患する子どもは、几帳面で学業成績も優秀なタイプが多い印象がある。また、自己の容姿や対人関係について悩み、自分を追い込むことが発症つながるため、そこにはある程度の知的レベルが必要なのではないかと予想される。そこで、小児摂食障害患児の知能検査の値について、他の疾患と比較し特徴的な傾向があるかどうかを検討した。

B. 研究方法

本研究において 2014 年 4 月～2015 年 8 月までにエントリーされた 94 例のうち、経過中 WISC-Ⅳ検査を施行された 44 例について、その FSIQ 値を検討した。対照群として、長崎県立こども医療福祉センターで 2012 年 5 月～2015 年 10 月までに OD や生活リズムの乱れを伴う不登校として入院治療を行い、WISC-Ⅳ検査を施行した 58 例を用いた。統計解析は分散を F 検定で、平均値を t 検定で行い、F 検定は片側検定で $p<0.05$、t 検定は両側検定で $p<0.05$ を有意水準とした。

C. 研究結果

摂食障害（ED）群 44 例の内訳は、神経性やせ症（AN-R、AN-BP）32 例、神経性過食症 1 例、回避・制限性食物摂取症（FAED、FD）10 例、機能性嘔吐症 1 例だった。このうち神経性やせ症の 32 例を AN 群、回避・制限性食物摂取症の 10 例を ARFID 群として比較検討した。対象者の特性について表 1 に示す。また、不登校群と摂食障害群の FSIQ 値の分布を図 1 に、AN 群と ARFID 群の分布を図 2 に示す。

不登校群と摂食障害群を比較すると、不登校群は 90≦FSIQ＜110 の症例が中心だが、摂食障害群は 100≦FSIQ＜130 の症例が多くかつ均等に分布しており、全体として不登校群に比べ高い FSIQ 値を示すのではないかと示唆された。しかし、摂食障害

群には FSIQ 値が低い症例も比較的均等に存在するため、両群の平均値に有意差は認められなかった（表 2）。なお、摂食障害群は不登校群と比べて FSIQ 値が高値から低値まで幅広く分布しており、これは F 検定で等分散ではないと判定された。

AN 群と ARFID 群の比較では、ARFID 群よりも AN 群に FSIQ 値の高い症例が多かった。しかし、この両群の分散と平均値および、不登校群と AN 群、不登校群と ARFID 群の分散と平均値に有意差は認めなかった（表 2）。

D. 考察

FSIQ 値の分布から、摂食障害患児は小児心身医学領域でよく遭遇する心身症・不登校の患児に比べると知的に高い子どもが多いように見える。しかし、摂食障害患児の FSIQ 値は平均値付近に集まるのではなく高値から低値まで比較的均等に分布しており、統計学的な有意差をもって摂食障害患児の知的レベルが心身症・不登校の患児に比べて高いという結果は得られなかった。むしろ、摂食障害患児は知的に高い層だけでなく、低い層まで幅広く分布する傾向にあるということがいえる。今後は、摂食障害患児における知的レベルの高い群と低い群が疾患として同一のものなのか、質の異なるものなのかの検証が必要になると思われる。なお、今回、摂食障害のサブタイプである AN と ARFID の間に知的レベルの差があるかどうかを検討したが、有意差は認められなかった。これから更に症例を蓄積していきながら、発達障害などの併存症の有無や、発症要因、精神病理などが知的レベルと関連しないかを検討するとともに、FSIQ 値だけでなく、VCI、PRI、WMI、PSI の各因子についても特徴的な傾向がないかを検討したい。

E. 結論

摂食障害患児の知能検査の値について検討した。摂食障害患児は心身症・不登校の患児と比べ FSIQ の平均値に差は認められなかったが、知的に高い層から低い層まで幅広く分布することがわかった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

2016 年 1 月 31 日に東京で開催された内田班会議において本研究の概要を発表した。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表 1：各群の特性

群	不登校	摂食障害	AN	ARFID
症例数	58	44	32	10
男	30	2	0	2
女	28	42	32	8
平均年齢 (SD)	13.24 (1.27)	12.32 (2.21)	12.69 (1.65)	10.80 (3.19)
平均 FSIQ (SD)	98.34 (13.16)	103.56 (16.61)	104.22 (16.90)	99.10 (16.42)

表 2：検定結果

FSIQ 値の比較	F 検定	t 検定
不登校群―摂食障害群	＊0.0498	0.0899
不登校群―AN 群	0.0505	0.0709
不登校群―ARFID 群	0.1506	0.8721
AN 群―ARFID 群	0.4972	0.4052

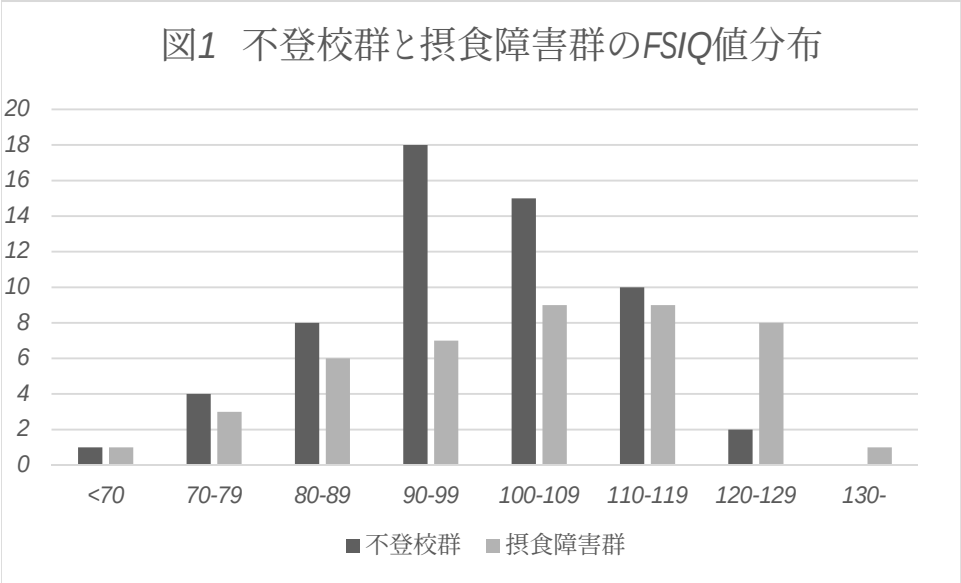
図1　不登校群と摂食障害群のFSIQ値分布
20
18
16
14
12
10
8
6
4
2
0
<70
70-79
80-89
90-99
100-109
110-119
120-129
130-
不登校群
摂食障害群

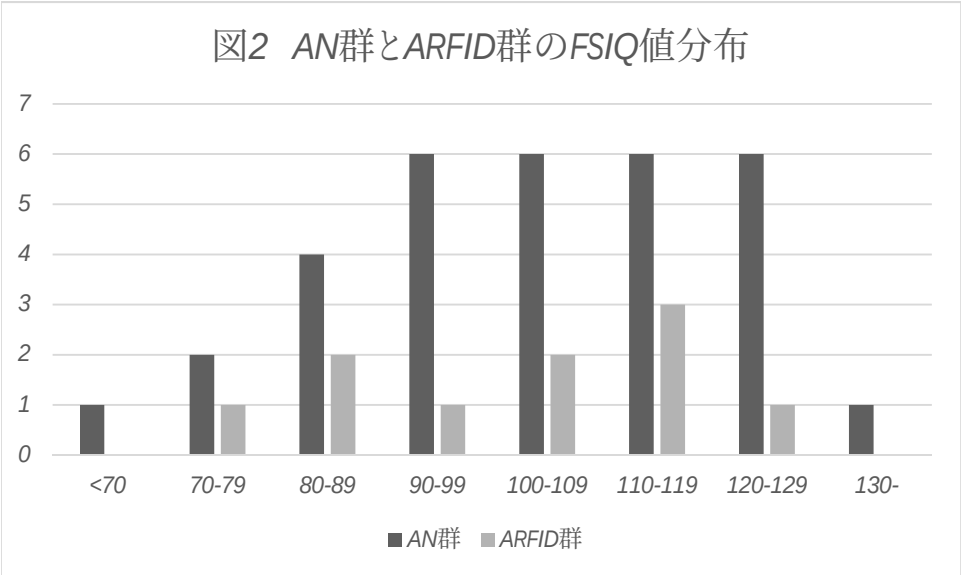
図2　AN群とARFID群のFSIQ値分布
7
6
5
4
3
2
1
0
<70
70-79
80-89
90-99
100-109
110-119
120-129
130-
AN群
ARFID群